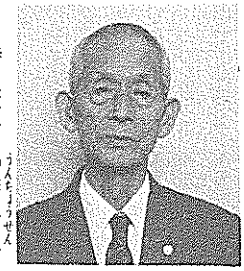
第一回市民学校から（2）

南国市は土佐のふるさと

利岡　冨次

南国市史編さん委員



利岡　冨次氏

西暦六八四年、白鳳の大地震が起り、海岸の向かい側にあった黒田郡が沈没した話がありますが、その時の書類に「運調船」が大きな被害を受けたと出ています。と言うことは船で税を納めるために、都まで運んでいたと言えます。つまり、千三百年の昔に国衙ができていて、そこに税を納め、都まで運んでいたことが想像できます。

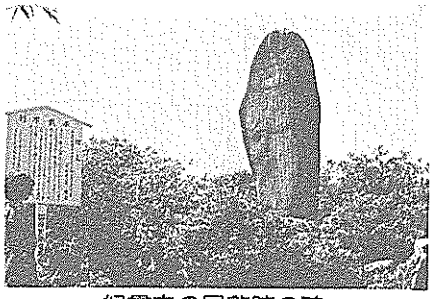
国衙跡として残っているのは、「内裏」で、国司の私邸にあたり、そこには三つの碑が建っています。紀子旧跡の碑＝紀貫之だけが居住した所ではなく、約百五十人の国司が、住居としています。碑には、九代山内豊雄の文字で

仰ぐ世にやどりしところ末遠く
　つたえんためとのこす石ぶみ

と和歌が書かれています。

千載不朽の碑＝これは十七代山内豊景公が書いたもので、下に書かれた紀貫之のりっぱな行いをたたえた文は、徳川時代の松平定信によるものですが、碑のできたのは大正時代になってからです。

〝土佐日記ふところにあり散る桜〟と書かれたのが、三番目の碑です。



紀貫之の屋敷跡の碑

昭和六年高浜虚子が、土佐日記をふところにして、内裏を訪ねた時の句ですが、その山桜も今は朽ち果てています。たぶん昭和六年頃は、生き生きしていたのでしょう。

このように、多くの国司が国衙にやって来て、奈良や京都の文化を伝え、その文化は、比江を中心にだんだんと土佐へ広がっていったと想像できます。そして国衙ができたということが、南国市が土佐のふるさとという理由にもなる訳です。

次に考えるのは、田村城のことです。平安時代になり、だんだん政治が乱れてくる中で、武士が蜂起し、八百年前源頼朝が鎌倉に幕府を開きました。頼朝は、国ごとに、守護・地頭を置いて治めますが、土佐にはどこに置いたか、わかっていません。はっきりわかったのは、六百年の昔、守護代細川頼益が最初です。

頼益は、文武兼ね備えた名将で、田村川の改修などを行っています。その後、満益、持益、勝益と四代続きますが、勝益の時京都で応仁の乱が起り、都へ帰って行きます。勝益は、頼益の供養にと桂昌寺を立て、後細勝寺と名を変え現在に至っていますが、この場所は城の西南のかどに当ります。田村城は国衙に匹敵する五㌶の広さをもち、平城で、外堀、内堀をめぐらしていました。

細川氏は、京都の文化を多く取り入れています。田村の南端に、「市場前」と言う地名があるように、田村城では市が開かれ、京都の文化は、この市町から土佐へ伝わって行ったのでしょう。

最後に長宗我部元親について考えてみます。応仁の乱が起こると、勝益は京都へ帰り、土佐の国は、東から安芸の安芸氏、香美郡の山田氏、長岡郡では北に本山氏、南に長宗我部氏、西に行って弘岡の吉良氏、蓮池の大平氏、その西に須崎の津野氏の七人が覇を競い戦国時代に入って行きます。

ところが、元親の祖父兼序は周囲に敵を受け、本山、吉良、大平、山田の四氏の連合軍に攻められ、落城してしまいます。兼序は戦死しますが、岡豊城の再興を願い、その子千雄丸を幡多の一条家へ逃がします。そして元服し国親と名のり、二十歳頃、一条家が本山氏らと仲介の労を取って、岡豊の城を回復することができました。

ある風のない夜、城のくすの木が根元から倒れ、家来が悪い知らせではないかと申し上げると、国親は笑って『これは吉報である。くすの木とは南の木と書く。これが倒れたと言うことは、大津が倒れることだ。今、兵を出して討ったなら、必ず勝利をおさめるだろう。』と言って攻め、大津の天竺花氏を滅ぼします。そしてその子元親は、ついに一五七五年に土佐を平定し、十年後には四国を統一しました。しかし豊臣秀吉に敗れ、土佐一国の主となります。

元親は、文武両道に力を入れますが、中でも名高いのは、南学の勉強です。その精神は『いかに大敵であろうと、我が正しいと思えば進んで行く。いかに誘われても、まちがいと思えば兵を出さない。』と言う非常にはっきりした、土佐の気風に合ったものです。

ところが、秀吉が薩摩国征伐の時、加わった長男信親が、大分県の戸次川で、家来七百人と全滅してしまいます。元親は、信親を失い心が変わって行きます。長男がなくなり、後嗣を四男の盛親にしたいと、家来に相談をした時、南学を勉強していた甥の親実と、いとこの親興が『元親には、二男も三男もあり、道理に合わない。』と反対しました。元親は怒り、二人に切腹を命じます。比江山の城主であった親興は『もはや、長宗我部氏の運命は、これで極まった。』と言って切腹し、生きるそれ以後、長宗我部氏は衰亡の道をたどって行く訳です。

このように、土方文化は、比江に根をおろし、田村で栄え、岡豊で実をむすんだ事を思うと、南国市は土佐のふるさとであると言っても過言ではないと思うのです。